

# 主張

共産同中央委員 奥見 克

(一九二七年二月)

## ▽共産同政治局水沢一派の陰謀と右翼日和主義

同盟の明大先輩闘争指導上に於ける事実を明らかにする——二月一日前後の事情について

誰が正しく、誰が誤っているのかを知るには事実を挙げれば十分である。事実は真実を語る。真実の前には何人と言ふとも偽善を装ふことを許されない。同盟政治局は厚顔無恥にも事実を歪め、真実を覆い隠し、自己の指導上の誤りと路線の破産を隠蔽している。そればかりか政治局に批判を行なう者を「反革命分子」呼ばわりし、社学同ゴロツキどもを使って暴力を加え、つぶし、にかかつていく。これだけみても、政治局「水沢一派」の日和見主義(極左主義も結局のところ日和見主義に根ざしている)、及び反動的本質は余すところなく暴露されているのだ。

いかに水沢一派が、つぶし、にかかつていこうとも、この間の事態が示す如く革命的左派の革命への情熱と隊伍をかき乱し消すことはできない。はつきりと言つておこう。水沢一派の諸君よ、必ずや近いうちに革命的左派は諸君たちにとって変わるだろう、というのを。水沢一派は今日の同盟内の事態を中共になぞらえ「革命派対実権派」と称して革命的左派を実権派に、つまり自分たちを革命派に見立てている。しかし、この様な問題のたて方は手前勝手であり、事態の本質を著しく歪めるものである。

何故なら、自らを革命派とせよとまでに名乗りたいのであれば、文字通り大衆・革命・闘争を起し、実権派を追いだしてみたらいい。九日と泉集會、十日生田集會で、革命派の諸君が冷感なる事実をつきつけられたことによつて大衆から完全に浮き上り沈黙せざるをえなかつたという事実は、何を物語るものなのか。

事態の本質は誰が原則的に問題をたて、事態の取捨に當つて、革命的に対応しているかにあるのであつて、たゞ革命的・言辭を誰が多く語つたかにあるのではない。革命的・言辭は今日の混乱した状況であればなおさらのこと一時的に左翼気取りの若者を魅きつけるものだ。

しかし、それは飽くまでも一時的であつて、永久に力を發揮するものではない。もし、永久に力を發揮するものであれば資本主義の黎明期にも革命は起つていたであらう。

しかし、歴史は労働者大衆が革命を起すのであつて、革命的・言辭のみを状況と係わりなく叫び、ポーズだけを気取りたい。革命党が起すのでないことを示している。

ましてやアマト同じく「反革命分子」「実権派」等々の言辭を何百回吐いたところで、大衆の革命的情熱をかき立て、持続させ決起させることなど思いもよらぬことであることははっきりしている。

にも拘らず大衆を忘れた一部の諸君は自分の能力をわきまえず、事大主義的に大言壮語しているのである。もう止したまえ喜劇を演じるのは。書記長水沢を頭とする一派の諸君!

君らはなぜ事実を明らかにしないのだ。なぜ自分の吐いた言葉は大衆の前で繰り返して言わないのだ。君らの口から出る言葉は「規律違反」「裏切者」「実権派」などというおとそ得力のない形式的、レッテル主義の言辭ではないか。そんなにわれわれが憎いのなら堂々と事実を明らかにしたらい。そんなに同盟の独裁的支配がしたいのならなにより自分の現在の地位を投げ捨て一兵卒として大衆の前に登場する度胸をみせたい。

そんなに勇氣があるのなら是非々々お目にかかりたいものだ。諸君がどれだけ大衆の前にて工作したことがあるか。諸君の今日の誤りは大衆を恐れていたために起つた必然的帰結である。

要するに諸君に一片の謙虚さなければ、一片の革命的内容も備つていないのだ。あるいは経済学者から与えられた公式的倫理と、知識以外の何物でもないのだ。

ところで今日の混乱した事態の本質と契機を物語るに十分な事実が一月二十日医歯大での書記長水沢の発言にある。彼は学対、政治局合同会議の席上(政治局員全てでは無い)、全体の空気が学費闘争も取捨の時期にきたという認識がある時、学対部長山崎(あの高名い官僚主義者と一緒に、今取捨したら「だから玉砕しなければ」という意味「ブント」の面目。がたない)と発言した。続けて彼は「中核派は清丈等を動員してこの闘争に介入している。彼らとの面目から断乎玉砕も辞さない覚悟で闘つた方がいい」と無責任にも発言した。ここでさ

すが水沢一派の諸君のうちにも当惑するものが出て来、瞬間的に會議は重苦しい空氣となつた。しかし、會議の決定は取捨という線で結論を下したのである。

しかし、日を迫るにつれて、益々敵の弾圧の前に闘う部分が脱落していくのであつて、水沢一派の玉砕論が陰謀的に計画されていくのである。更に付言すれば二十八日夜政治局学対、LC合同會議がたれ、近いうちに取捨することが確認され、最終的にはLCにまかせることが確認され、学対は退席した。この段階で政治局学対はLCの主体性を認め、明大の闘う部分の主体性を尊重していた。

LCでは「実質白紙撤回」つまり行けば値上げをさせない線という含みで、即ち増収分の別途保管を学生との共同管理まで追求し、取捨する(中間集約を行ない、四月以降の大衆運動で完全撤回を勝ちとる)ことが決定していたのであつた。

この様な経過を踏まえ生田、和泉では三十一日、大衆的に取捨の方向が打ち出されていくのである。

このころから他分派は一部共闘會議を使つて一部全学闘に対する無責任な、突き上げ、を開始するのである。そもそも他分派介入は一日にはいつてから本格化してきた。それは一部共闘會議に対する支援という名を貸りて、「こゝろこゝろ」部全学闘の闘争方針を混乱させ、自滅的狀況を生起させ、ハイエナの如くふるまふことを唯一の目的としていたにすぎない。

二八団交、二九団交等の彼らの介入の姿勢はそのことを如実に物語るものである。したがつて他分派の支援は、社学同の混乱による政治責任を一部共闘會議という大衆組織の利益の貫徹に便乗して追求し、学生会から社学同を開放しようとしたことであつたのである。しかし、仮に主観的には大衆の利益に立脚して、全学闘に対する批判を行なつたとしても、そうであれば、彼らの思想性は今日の日本資本主義の構造的再編という転換点にたつての階級闘争の構造について全く無知であり、それ故、安保、日韓闘争の総括が極めて、客観主義、個人主義的にしかなされなかつたこと、目も暴落する。かかる他分派の介入の思想と行動に関しては、総括の項で明らかにしそれと水沢一派がいかに同じであるかを鮮明にしたい。

それ故、水沢発言にある様に政治局(水沢一派)はかかる他分派の介入の目的を知つてか知らずか意識的に他

分派との党派性をあいまいにし、それとの闘争を回避し、左翼的ポーズのみに執着した結果、完全に極左冒険主義と右翼日和主義との間を往復する羽目になるのである。

ところで、二部、他分派の、突き上げ、の中で三十一日の夜学対、LC合同會議(於中大)が催された。この會議は最終的には意見交換の場として確認されたが、それは主にLCの主体性の強調という意味で確認されたのである。そこで、再度「八理事會提案を基軸に取捨する、しかもその時期は二兩日にあることとしたのである。

この決定からして、学対部員成島(東大)にいたつては、一日の全学連集會そのものが無意味ではないかという発言が終了後出たのである。しかし、今さら止める訳にはいかないから一応聞いて原則的な視点を臨むことまで確認した(この時水沢は出席していなかつた。

こうして一日を過ぎ各地区闘では理事會が提案を再度(三十日)一切白紙撤回という学長声明がでていた。取捨案としてだすのであれば取捨すべきだという見解に到達した。

しかし、全学連集會を契機に水沢一派は三十日、三十一日決定を強引に自己否定し、今まで一度も顔を見せなかつた飛鳥をも動員して学対、政治局合同會議を召集する一方、早大、専大、慶大等の社学同部隊を動員して各地区闘指導部分へのオルグと喝喝を加えながら展開してきた。言うまでもなくLC、及び各地区闘では混乱が発生した。しかし、生田、本校段階ではほぼ會議を続行でき取捨の結論にいたつた。ただ和泉段階では會議の後半から混乱に達し、會議そのものが破壊されたが、当然のこととして以前からの確認にしたがって指導部分では取捨の結論には要らなかつた。

この様な事態の中で大内委員長は全学闘書記局、学生会中核の合同會議を召集しようとしたが、デモ、オルグ等で集まらずその後各地区闘のデモへ参加し終つた闘争委員が集まつたので、各地区闘争委員長が方針を提起し、討論が開始され、全学闘、中核メンバーはそれに参加し、全員一同に會すことができなかった。しかも、社学同学対がこの會議の開催を認めないと言言し、全学闘のメンバーを個々につかまえては、オルグ、するという状況となれば、なおさらのこと會議の開催は不可能に陥らざるをえなかつた訳である。

そこで止むなく大内委員長は持ち回りで個人的に意見を聞かざるを得なくなつたのである。一日午後九時段階

での作業であつたと思われる。

このころ政治局、学対会議が正式に開かれた。そこには「向等の指示（？）で早大、専大、慶大等の社学同盟員二十数名ほどが動員され、収拾派に対し喝喝を加え、バ声を浴びせかけてきていた。その様な会議の中で勝ち誇った口振りで一向は議長（？）として「採決をとりたい。ついでには両者から一名ずつ意見を出して欲しい」旨の発言がなされた。このやり方は言うまでもなく、ブルジョア民主主義の徹底した実践以外の何物でもなく、プロレタリア民主主義に則っていない。

日露条約強行批准に当って政府自民党がとったやり方と全く同じやり口であり、それより更に悪いことに二十、三十一日のあれほどまでに確認された事項を舌の根も乾かぬうちに、しかも闘争の実態がその時よりもしり貧状態になつていくという時に突如としてファッショ的やり方で覆そつとした訳である。したがって、わたしは一向の発言のあと、「分派闘争をやる気なのか」と問い返さざるをえなかつた。彼らは答えることができないのである。何故なら、わたし（たち）を同盟員として拘束し、筋書き通り「規則違反」として除名することを最初から狙つていたのである（二十七日から二十九日にかけて水沢一派のフラクが開かれ除名が検討されたフシがある）。その方が彼らにとつて対外的面目を保てるからである。

ところでその直後わたしが最初に発言した内容は要旨次の通りである。

即ち「何故二十八日に理事会が提案をださざるをえなかつたかという本質的な内容を踏まえる必要がある。そして同時に大衆運動の論理と美態との関連から、政治的決断を下さなければならぬ（この時早大の某はそんなものは関係がないとヤジリ、同調する声が二、三あつた）。二十日、二十五日の団交であればとまで強硬な発言をした理事会は、それまで署名運動という形で偽善的民主的ポーズをとり続けてきた体育会、及び四年生の一部の卒業生問題を媒介とした闘争分断の口実を逆に奮い、前に暴力的決起の口実を与えていくという方向をもつたが、逆に右翼（前近代派）に事態收拾の主導権を握らせる結果となり、自らの立脚点たる一部の左派と新保守主義（近代派）の基盤そのものを右翼の前にパクられる可能性をつくりだした。一方学生の徹底抗戦が仮にあるとすれば、右翼だけではなしに官僚専入という形で事態は最

悪の方向へ進まざるをえない。とすれば新保守派をも左派の主導権のもとに理事会に対する政治責任の追究が高まり失脚せざるをえない。いずれにせよ、理事会にとつて学生（下ロツキスト）と心中することを意味する訳だ。ところで学生にあつてはすでに学内での活動が規制され、大衆を集約できない状況に陥つており、しかも右翼テロの前に活動家すら結集できないという彼我の力関係では決定的に不利な局面にたたきされている。しかも学内の政治構造がこれ以上大衆不在のまま闘争が行なわれるとすれば、理事会は右翼との一体化を好むと好まざる

とに拘らずさなねばならず、全学闘解放にとどまらず学生会そのものにも大幅な規制を加えることは必至であり、玉碎するとすれば右翼、国家権力更に処分という三重の弾圧を覚悟の上で四月以後の大衆運動を考えねばならない。現在そのような体制はない。更にそのような事態は学内の左派内部の主導権をめぐる日共、民青を無キズにして権力につかせることの少なうとも基盤を提供することである。彼らは基本的な学生が理事会と共倒れすることを狙っているからこそ、二八提案の即時、教授、学生を動員し「ボス交」というデマを流し、全学闘に対する不信をつくり出し活動家全体を極左の方向で突き上げさせようとしたのである。

こうした構造にあつて理事会は収拾案をだしてきたのであり、われわれにとつて一時的休戦状態をつくり出し、反右翼闘争を闘い抜く中で、戦線を再構築し四月以降学費値上げ阻止（増収分全額返還闘争）の闘いを組むことが求められている。しかも調印は時間の問題であり、この期を逃すとすれば事実上玉碎路線を歩むことになる。全大衆的には承認はえられないが学生大会等で最終的には承認を得る手続きをふめば問題はない。したがってフロントの党派性は（この点については三十日の会議でも確認されていたのであるが）収拾という点に於いて総括と展望をめぐつて立てられなくてはならない以上が発言要旨である。

このあと成島（静大）が発言した。

「収拾するのは敗北だ。二月四日和泉パレード再構築、生田は十日前後パレード構築、そして本校へと闘うべきだ。玉碎になるかどうか解らない。それを追求してその時はその時で考えればよい。」

おおよそこの様な発言がなされ、若干の質疑応答がなされたが、飛鳥は「闘うからといって明大が全体として

反動化するとは今まで例がないから考えられない」、成島（静大）、早大の連中はかの水沢発言の意をくんで「全国社学同明治かの問題だ」と血相を変えてヤジリ出した。

そして採決がなされ、六・三・一でもって予定通り（？）玉碎路線が強行されたのである。

しかし、明大の大衆指導組織はすでに確認がなされた後であった。そこで彼らはそれを上から即ち政治組織段階で否定していくためにしC会議を召集した。しかし、学対決定（？）と称した二月四日パレード云々が一笑に付されるや、それを引つこめ、だとすれば集会だけでもいい、というデタラメな態度にひよう変し、完全に無方針状態に陥り、ただ調印を否定するのみという指導上の実質的放棄に陥つたのである。こうして学対で再度検討するとう無責任きまりない姿勢に突如（？）転換したのである。したがって、採決そのものが無効となつたばかりか、除名、自体も無効という他はない。

この種の転換は一月にはいつて以来、多々みられたところであるが、水沢発言にはじまり「全国が明治か」の問題設定にいたる、思想と行動は或る意味では一向の性格そのものを物語るものでもあるが、このつまりフロントの党建設論、階級形成論、大衆運動論等およそ革命的前衛にとつて死活の党派性に於いてあまいであり、かつかかる問題意識の不統一が欠落していることの証左に他ならない。しかも、水沢一派の徹底した官僚主義と日和見主義とが結合し、一層敷い難い事態を招いたといつてよい。

しC会議の時、わたしは、学対、政治局会議の雰囲気から身の危険を感じざるをえなかつたので、すぐ中大の学館から脱出して居ない。又学対決定自体を認めない立場に立つたので、もはや出る必要性をかんじなかつたのである。

調印を暴力的にも阻止せんとした当時の水沢一派の空気がから大内委員長等が大衆の利益にたつて勇気をもって脱出し、調印に臨んだということは賞賛されるべきである。

にも拘らず二日以後「裏切り者」「反革命分子」という口実でテロに走つた水沢一派の行為は、左翼の品性としても許されないばかりか、更に後に明らかになる様に彼ら自身の理論と思想の内容がいかに貧弱なものなのかを物語るものである。

思想と理論の貧困から革命的実践は生まれようはずがない。又彼らは安保以後、血のじみ出る分派闘争の教訓から大衆運動を媒介とした分派闘争への転換を計つた活動の歴史を清算し、天上界での議論と実践にふけるのみであり、この教訓を捨て去り歴史を数歩も後退させようというものだ。

湯島の一角は完全に大衆から無縁である。無縁なところでどうぞ好きなだけ、除名者を生産してくれたまえ。次に来るものは諸君たちの番だ。その時は大衆から頭をコッパミシンに打ちくだかれ、諸君たちの生命が断たれる時であることをしっかりと肝に銘ずるべきである。